



LGBTIQAと性暴力：
想定されていない“生き抜く”人たちと共に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 実穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017685

性暴力——その後を生き抜く人たちと共に
第1回 講演2

LGBTIQAと性暴力

——想定されていない“生き抜く”人たちと共に——

岡田 実穂

レイプクライシス・ネットワーク（RC-NET）という団体を代表をしています岡田実穂と申します。レイプクライシス・ネットワークは11年ほど前、2009年に私が作った団体ですが、活動を始めた当初から「ジェンダーを問わない」「その人の性別などを問わない」で活動をしていくということをやってきました。「問わない」というのは、「誰でも」「誰をも想定して」ということですが、特に私自身がLGBTQの中でもレズビアンの方でも当事者でもあるということもあって、LGBTQコミュニティと一緒にいたり、そこから声を聞く機会がととても多かったということがあります。その中で、たとえば全国にワンストップセンターができるなど性暴力に関してのいろいろな取り組みが進む中でも、LGBTQ、いわゆるセクシュアル・マイノリティの人たちは相談を聞いてもらうことすらされていないとか、いろいろな制度がないということを実感してきて、「誰をも対象とする」というのではなく、LGBTQのことに特化して活動を進めていこうということで、今はBroken Rainbow-japanというLGBTQ、LGBTIQAを対象とした性暴力被害に関する団体を仲間と立ち上げて活動を進めています。今日は「LGBTIQAと性暴力——想定されていない“生き抜く”人たちと共に——」というテーマでお話をさせていただきます。

LGBTIQAとまでいうと、「なんだろう、それ？」と思う人もいると思

います。性自認、性的指向、性表現等々、性的特徴も含めてアイデンティティは、Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシュアル）、Transgender（トランスジェンダー）、Inter-sex（インターセックス）、Queer & Questioning（クィア&クエスチョニング）、Asexual（エイセクシュアル）などいろいろあるのですが、そのそれぞれの頭文字を取り、マジョリティとは異なるSOGIESC（性的指向、性自認、性表現、性的特徴）を持つ人々全体を表したものになります。

Broken Rainbow-japanの立ち位置：急性期支援

急性期に人を孤立させないための事業

私たちは急性期支援を一番重要なものとして活動をしています。急性期とは何かを後で話しますが、そのために居場所作り事業として、今はちょっとお休みしていますが、コミュニティカフェを青森で運営したり、相談事業に関してはメール・電話・面接・同行支援も行っています。また情報発信については、LGBTに関しては特に性暴力被害に関する情報が本当に少ないということもあるので、できるだけその発信には力を入れています。

急性期を見過ごさせないための事業

他にも急性期を見過ごさせないための事業ということでは、相談員養成や研修の講師派遣などを行っています。資料作成というのは、本当に情報が少ない中で、とにかく世界中各国から情報を集めて翻訳して日本で使えるようにしていくという作業がかなりウェイトを占めるものとしてありますので、当たり前なのですが資料作成というのがかなり大きいです。いろいろな啓発イベントの企画運営をしたり、こうした中で、LGBTIQの性暴力被害に関してどういう制度が必要なのか、どういう支援が必要なのかということを経験していきたくて、それを政策提言していきたくてしています。

急性期とは何か

急性期とは何かという話ですが、日本ではいまだに医療的急性期ということが言われることが多いので、性暴力の急性期というと3日ないし7日というイメージを持つ方が多くいます。この医療的急性期というのは、たとえば緊急避妊薬で妊娠を防げるという期間、事件発生から3日（72時間）以内ですね、後は性感染症に対しての対策を打てる期間ということですが、私たちが言っている急性期は性暴力における急性期（レイプクライシス）というもので、それは医療的急性期も含むけれども別の物というふうに認識をしています。

レイプクライシスは、事件後すぐであっても、事件から何十年も経った後であっても起きるものです。性暴力という事柄をきっかけとして、その人の命が脅かされたりとか、それが緊急・急性的に発生した時のことを「急性期」と呼んでいます。何十年も前のことを思い出して今どうしてもつらくなってしまって、生きているのがつらいと思うような時もあると思います。でも、たとえば性暴力の電話相談などにかけても、「性暴力被害にあって」「実は30年前なんですけど」というようなことを言ったら、「ああ、昔のことなんですわね」というような対応をされたり、あまり重要ではないような言われ方をするというをよく聞きます。それはやはり、急性期を医療的なものとして判断しているからというところがあるかなと思います。何十年前のことであっても、その緊急性というのは当事者にとっても大きいものだという事です。

RC-NETの特徴：オールジェンダー視点での当事者サポート

先ほども言ったように、オールジェンダー（どのようなジェンダーであっても）という視点で当事者のサポートを考えるということをしています。

「性暴力とは何か」というと、私たちはよく「性の健康／権利の侵害である」と言っています。性の健康に関しては後にも出てくるかと思いますが、要は相手と自分との関係性の中での健康に関するリスクについて定め

たものです。特に2000年周辺になってから言われるようになった人権の一つです。

性に関しての健康を阻害する要因というのはたくさんあると思います。リプロダクティブヘルスの問題であったり、セクシュアル・オリエンテーションによって、誰を好きかとか自分の性別が何かということによって差別をされる。たとえば、同性間の性行為が違法となっている国は世界中にまだ70ヵ国程度あります。その中には死刑となるような国もあります。「セクシュアリティを矯正する」という名目でレイプをすることが合法的に、ある種の文化となっているような地域もあります。そうした中で、権利侵害という文脈でも、性暴力を「性の健康／権利を侵害されること」と定義しています。

実際、被害は性別に関係なく発生しています。よく言われるデータですが、女性の3人に1人が何らかの性暴力被害にあっている。男性の5～6人に1人が生涯のうちに性暴力被害にあう。そのことについて後で話します。そして、性暴力被害の中では、いわゆる異性愛の女性の被害が多く語られますが、LGBTIQAの被害というのはそれよりも多いと言われています。

LGBTIQAはいわゆるセクシュアル・マイノリティと言われるわけで、マイノリティというのは少数であるということですから、人数という枠組みの中では小さい層かもしれません。けれども、人権というのは数で決められるものではなく、そしてその少ない人口層であれ被害率が突出しているということは事実としてあります。もちろん男性の被害もあります。なので、被害があるかないかということ进行を問うこと自体があまりふさわしくないので、現実問題として性別に関係なく被害が発生しているという事実に基づいてサポートしていく、ということを考えています。

また、性別の特定ではなく、キーポピュレーションによってサポート体制を考えるということをしています。キーポピュレーションというのは、よくHIVの業界で言われることですが、HIV感染者数の人口を左右するような人口層のことで、予防啓発をするときに鍵となる人たちです。

それを性暴力にあてはめると、たとえば被害暗数と言われるもの、その人口を左右するような人口層ということです。たとえばどういう人たちがいるかと言えば、女性です。性暴力被害の鍵になる人口層というのは、一つは女性。だからこそ、女性に対する性暴力被害者支援の枠組みをしっかりと考えていかなければいけない。このことは確かなことなんです。もう少し考えてみれば、たとえば子どもに対しての性暴力というのもすごく重要な問題です。そのことを思うと、子どもへの支援を考えなければいけない。また、障害のある人たちに対してのサポートも特化して考えなければいけないものとしてあると思いますし、被差別部落の人たちはDV被害の経験率が高いというような調査も出ていますが、そうした複合的な差別要因を持っている人たちの支援に関しての制度作り、体制というのをしっかりと考えていかなければいけない。その中の一つとして、被害人口層がとても高いと言われているLGBTのこと、LGBTIQAのことを今日はお話ししたいと思っています。

暴力の温床に気付く／全てに関わる性暴力の実態

LGBTの暴力被害について話す時には、やはり「差別ってなんだろうか」ということをしっかり考えておいてもらいたいと思っています。Lとはレズビアンで、ゲイとは、トランスジェンダーとは、というようなことを知っていれば暴力についての話を聞けるのかというと、そうではない。先ほど複合化された差別と言いましたが、本当にLGBTIQAの人たちに対して社会は多くの差別や偏見をぶつけてきます。たとえばどういうことがあるかということ、性差別、異性愛至上主義、いろいろな差別、トランスフォビア、ホモフォビア等、嫌悪を向けられることなどがある。

けれども、まず最初に私たちが考えなければいけないのは、社会の中で、私たちが生活をしている中で、本当に多くのLGBTIQAを対象とした冗談や噂話、ステレオタイプを押し付けるような話し方・やり方、敵意の表明、配慮を欠いた発言、排除言動などが蔓延しているということです。ちょっとした冗談やちょっとした噂、「なんかあの人ってゲイ疑惑とかあるよね」

「ホモ疑惑とかあるよね」といったこととか、それを笑い話のようにしていたり、「ああいう人たちって、ちょっと私苦手なんだけど。キモい」とか、そうした先入観に基づいた、事件化まではしないけれども、たくさんの差別的な発言が蔓延しています。



でも、そういうことは結構世の中にたくさんありすぎて、私も一個一個言われれば引かかるわけですが、引がかかっていると、周囲の多くの人たちから「そんなの気にしていたらやっていけないから、あんまり気にしないほうがいいよ」「そんなこと言う人は一部の人だから」といったことを言われることが多くあります。けれども、こういうのは放っておくと「言っても良いこと」になってしまうんです。「社会の中でこれくらいは許されること」になってしまう。許されると思っていると大体のことはもっと悪化していくんです。そうすると、たとえばスケープゴートであるとか、もう人間扱いをされない非人間化、「あんな人間じゃないよね。ちょっとおかしいよね」と言われたり、嘲笑の対象とされたり、社会的に回避されたり、誹謗中傷されたり、意図的な差別表現をされるということがあり

ます。その辺りは偏見と言われるもので、少しずつ事件化されていくことも起きてきます。この辺りのことも実際に日本でたくさん起きています。

けれども、日本には差別禁止法もないですし、差別表現もその人の意見ということで許容されてしまう。許容されていくと、またどんどん物事は悪化していく。その中で住居差別や教育差別、就職差別や明確な嫌がらせや社会的な排除というものが起きてくる。この辺りはもう民事事件として発生してきますが、差別というもの、明確な差別事案です。

こういったことが日本でも起きています。教育差別に関しても、たとえばお茶の水女子大学や奈良女子大学がトランスジェンダー女性を受け入れるということを言ってからというもの、インターネット上などを始め、政党なども言っていますが、トランスジェンダーの受け入れの可否についていろいろ好き勝手な言い方をされて、それが非常に差別的なものをはらんでいるものもある。そうした中でトランス女性が女性だと思えば、今現在日本で女性であるにもかかわらず女子大にいけないということは今までもあったことですし、また単純に制服の問題として、この制服を着るということが難しく学校に行けない人たちもいる。就職に関してはもう明確に差別があります。社会的な排除というものが起きています。住居差別に関しても、公営住宅に同性カップルは住めない地域がまだまだ多いです。では、こうしたものに関して完全に是正されているかというところではない。私は青森に住んでいますが、青森市の公営住宅に関しては同性カップルは入れないということが明言されていて、そのことについてなんら話し合いはされていない状況です。それも仕方ない、今はまだそういう時代だ、と言われている。

仕方がないと言われていると、殺人、強姦、暴行、脅迫、放火、テロ等々の暴力事件に発展していってしまう可能性もある。「こんなことは日本では起きない。日本はLGBTにとって安全な国だ」と言う人もいますが、たとえば新木場事件という事件がありました。「ホモは警察に行かない」と加害者が言っていたが、公園にいる同性愛者たちがお金を奪われて殴り殺されるという事件でした。現実的に日本でも起きています。そして強姦に関しては今日お話しすることです。

こうしたものすら許容するような社会というのはどうなるかという、この差別に関するピラミッド構造の中ではジェノサイドという最終地点が発生する可能性もある。意図的・制度的な民族の抹消、ここで言うとLGBTIQというものに関して抹消していく、この世にあってはいけないもののだとしていく。これは想像がつかないという人があるかもしれませんがこれも実際に起きたことで、第二次世界大戦の時にナチスがやったことです。同性愛者やトランスジェンダーたちにピンクトライアングル、ブラックトライアングルなどをつけて収容所に送るといことがされました。

私たちが過ごしている社会の中で起きていた様々な冗談や噂レベルのことというのは、決してその程度のちょっとしたことではなくて、やはりそれを許容していいとはいけないんだということ、それが許容されている社会の中で暴力はより悪化していく、差別がより悪化していったということは、ぜひ一つの認識として持っておいていただけたらと思います。

性暴力=合意のない性的言動



皆さんご存知のとおり、本当にいろいろな形で性暴力は発生しています。

その中でもたとえばセクシュアリティ、その人の性の有り様に対する嫌悪、そのことを理由としたレイプであるとか性暴力も発生しています。今日はそのことについてメインに話をしようと思います。セクシュアリティへの嫌悪を理由とした性暴力ということで、資料に例示しているようないろいろなことが起きる可能性があるということです。

性暴力を潜在化させた社会／司法

LGBTIQAへの性暴力というと、「最近はそういうことも言われるようになった」とか、何か新しい話題であるような認識も社会にはあるのだろうなと思います。でも、その人たちが今被害にあい出したわけではないのです。いろいろな形の性暴力があるし、先ほど伊藤良子さんにお話をいただいたように、社会には性暴力に関するステレオタイプというものがある。けれども現実はそうではないわけです。もちろん、活動する中でこうしたほうが便利だからとか、こうしたほうが社会にはわかってもらいやすいからといった理由で簡易化された語りがいろいろな場所でされてきたということはあります。けれども、性暴力被害の実際は、本当に多様なわけです。年齢や性別／性自認、性的指向、性表現、性的な特徴であるとか、またその人たちの職業、生活環境、容姿等、そうしたものを問わずに性暴力は発生している。それは事実です。

けれども、その発生している性暴力のうちで司法的評価を受けるのはごく一部です。警察が対応する、裁判をする、そうした中で司法的評価を受ける被害というのは本当にごくごく一部です。その中には、警察に行かなかったとか起訴されなかったとかいうものだけではなく、警察に行くこともかなわなかった、起訴する／しないどころか被害と認めてもらうこともできなかった、というものがたくさんあるわけです。

ですので、そもそもこの日本の国での法律というものが、特にLGBTIQAの被害に関しては、被害を潜在化、潜伏化させてしまった。そしてそこに対してスティグマ、偏見、二次被害を増長させ発生させ続けてしまっているという事実があるかなと思います。

小難しい話になってしまいますが、性暴力に関しては刑法の中で176条／177条で定められていて、その保護法益というのは個人的法益とされています。どういうことかという、「性的自由ないし性的自己決定権」を個人的法益として守るということです。要は日本の刑法というのも性的健康／権利に関しての規定なわけです。その人たちが性的に健康であること、権利を有しているということ、自分でそのことを決めていいんだということを、一人ひとりの個人のための法益として定めているものです。けれども、どうしても社会の認識する性暴力というものに合わせてしまっている。私は、最近LGBTの被害に関して法務省などでお話しさせてもらったりすることもあるのですが、そういう中でよく思うのは、法律が社会の規範を作っているんだなということです。たとえば、2017年までずっと110年間、強姦罪というのは「女性しか被害にあわない」と言われて定められてきました。どんな人が被害にあっても、「女性しか被害にあわない」と法律上定めているわけだから、法律がそう言っているのだから社会の認識が変わるわけがないんです。社会を変えていくという時には、やはり法律とか社会の制度を変えていく必要があるんだなと思っています。

社会的偏見と性暴力

本当に様々な偏見が、特に性暴力に関してはあります。それはLGBTだけではなくて全体のこととして、「レイプされるのは被害者に責任がある」とか「本当に嫌だったら抵抗ができるはずだ」とか「顔見知りからの被害なんていうものは本来その二人の関係の問題（合意がある関係での痴話喧嘩）だ」とか「レイプするような人は異常で特殊な男性だけである」というようなこととか、よく社会が言うのは「性的欲求が強姦の原因である」「だから風俗店を増やせばいいんだ」とか、そういう言い方がされます。ですが、そもそもセックスワーカーたちが暴力の被害にあうなんてことは絶対にあってはいけないことですよ。どんな人たちであっても暴力の対象とされるべきではないし、そんな職業差別が許されるわけではないです。実際に、性的な欲求ということだけではなく様々な要因がある。でも、そうし

たいろいろな偏見の中でサバイバーたちは言葉を失ってしまったり、被害にあったということを訴えることができず、自分自身は汚くなってしまったんじゃないか、自分が悪いんじゃないか、という思いを募らせていくということはよく言われることです。

そういったことがより強化されるのがLGBTIQAの被害というものかなと思っています。なぜなら元から差別があるからです。元から差別があってそこに複合的により強化される形でいわゆるレイプ神話というものが積み重なっていく。その中には、LGBTIQAの人たちのコミュニティというものを知らなければなかなか話が聞けないような、理解ができないようなこともあるかと思います。

私はLGBTIQAのサバイバーたちと話す機会がとても多いのですが、それと同時にいわゆる女性の性暴力被害に関しての相談を聞くということもずっとしてきました。そうした場において、なぜこんなにもつらい思いをさせなければいけないんだろうと思うことがたくさんあって、今日何を話そうかとずっと考えていたのですが、研修などでは、コミュニティを知っていくこととか、その人たちがどういう感情であったのかということの説明をいつもしているのですが、今日のテーマにもおいたように、その人たちと共に生きるということとか、自分自身が見てきた中で感じたことというのもお話できればと思っています。

強姦されるのは被害者に責任がある

たとえば、「出会い系を使ったのなら、被害にあっても仕方がない。そんな場所に行ったなんて」ということ一つ取っても、LGBTIQAの場合は、特に地方の場合だと仲間に会える機会というのが本当に極端に少ないです。どこに仲間がいるかわからないし、ネット上でしか会えないということはかなり多くある話です。だからこそ、SNSであるとか、セクシュアリティを限定した形での出会い系サイトなどで知り合って、そこから友だちになったり、付き合ってみたり、いわゆる一日だけのセックスを試みたり、いろいろな人たちがいろいろな使い方をしているけれども、出会い系を使ったということが一概にセックス目的であるかどうかということは、

認識としてはいわゆる一般の方とは違うものがあるかなと思います。同様に、「飲み屋で知り合った」というのが、たとえば二丁目であるとか、大阪なら堂山であるとかだったら、「そうした場に行ったのなら被害にあっても仕方ない」と言われるようなことに関しても、そのコミュニティというものがあって、その場に行くことで知り合える人たちがいるということです。「初対面の人と人気がない場所に行くなんて被害にあっても仕方ない」といったことに関しても、たとえば地方であれば特にですが、地元で当事者の仲間と会うという時に、人が多くいる場所だと話ができない。だからこそ、たとえばカラオケ屋とか、あまり人が来ない場所にまずは行くということはよくあることです。そうしたことは、本人たちにとっては仕方なかったというよりは当たり前のことなのですが、その時点で「そういうのは被害じゃない」と言われてしまったりします。

トランスジェンダー、特にトランス女性に対して、社会はものすごく性的な目線で見るといえることがあると思います。その人が自分の性自認に基づいて女性の性表現をしていたことに対して、「女装していたということは、その気があったということではないか」というようなことを言ったりします。これは本当に何回も聞いたことです。警察や弁護士といった人たちが安易に言うことです。電話相談員でも言っていた人がいました。

発展場というものがありますが、要はセックス目的で行くような場所です。そこも結構いろいろなルールがあって、たとえば毛布をかけている時はやりたくないという意味を示しているとか、その場所場所でルールがあります。そうした中で集団でのレイプにあうこともあります。もちろん社会はそれを性暴力だと認めないというようなことがあります。

いろいろな意味でそのコミュニティの中では当たり前であることが社会の中で認識されていないことによって、もう入口が閉ざされてしまうというようなこともあります。

本当に嫌だったら抵抗できるはず

「本当に嫌だったら抵抗できるはず」ということに関しても、「そうじゃない」ということが言われますが、たとえば性暴力の話をする時に、抵抗

できない理由として「フリーズ」ということが最近よく言われます。いきなりの出来事にびっくりして停止状態になってしまう、脳の状態として、とかいろいろなことが言われますが、抵抗できない理由というのは「フリーズ」だけではなくて、いろいろなことがあるわけです。

たとえば、その時に自分自身のセクシュアリティやジェンダーアイデンティティに関してアウティングする、人にばらす、と脅され、「ばれてもいいんだね」と言われて何も言えなくなったとか、トランスジェンダーの場合でも、「だって女じゃないんでしょう?」「男じゃないんでしょう?」と自分のアイデンティティを試すような言われ方をして、「嫌だ」と言ったり拒否をしたら自分自身のアイデンティティを否定することになってしまうのではないかと、といった理由で何も言えなくなってしまったという人もいます。

インターセックスの人たちからもよく相談がありますが、加害者が「研究のためだから」というような言い訳をして、医療者とか教育者からの被害にあったとか、そうしたこともよく聞かれることです。

また、コミュニティの中でという意味でいうと、「この業界の通過儀礼だから」とか言われる。

「行く場所なんか無いくせに」という意味では、DVのケースなどでも、住居に関しては相手の契約で住んでいることがよくありますので、「ここを追い出されたらどこか行く場所があるのか」「どうせ行ける場所なんか無いくせに」と言われる。特に親との関係なども悪い人たちというのはよくいます。DV関係になっていると、一般のDVよりもより狭い範囲で関係性が作られていくということがあります。たとえば同性愛者であるということで、それだけでも二人の関係を知っている人が少ないという中で相談できる人も少ない。DVによって関係性を閉じられているというところでは、そうした意味で抵抗ができないということも多くあります。

こんな被害にあったとは言えない

よく当事者たちから聞くことですが、「こんな被害にあったとは言えない」。性暴力について語ることはすごく難しいことなんだという言い方も

できるけれども、もっと具体的に語るができないでいる人たちをたくさん見てきました。

たとえば、「自分がコミュニティの中で被害にあったという話をしたら、LGBTにとってよくないんじゃないか」というようなことを言う人も多くいます。いわゆる嫌悪感情への燃料となってしまうのではないか、「やっぱりゲイって危ない」「レズビアン怖い」「トランスって危ない」みたいな社会の言い分に寄与してしまうことになるんじゃないか、と思うと言えない、という人もいます。

また、アウティングをする、その人の性自認や性的指向等々を社会に対して暴露するという行為は、加害者に対しても行っては駄目じゃないか、という意識を持っている人もいます。加害されたのに、思ったりはするけれども、いくら加害者であっても、その人のことをアウティングしていいのかどうか、それはすごく怖い、ということをやったりします。

また、全体の問題としてLGBTIQAだけでなく他の人たちでもあることだと思いますが、被害にあった人がそのコミュニティにいられなくなってしまう。たとえば会社で被害にあった場合に、なぜか被害者が会社を去ることになり、加害者はそのままそこにいるといったことはどこでも起きるのですが、LGBTIQAのコミュニティにいられなくなってしまうということが、そのコミュニティのことを知らない人が思うのよりも、なかなかつらいものであるということです。なぜかと言えば、たとえばその会社が駄目なら次にまた他の会社を探して、というように変えることができないものだからです。コミュニティはいくら増えてきたといっても、ものすごく狭いものすごく少ないわけです。その中で居場所がなくなることが怖い。

事前説明の負担がすごく大きいということもあります。自分の相手が誰か、加害者はどういう関係の人かとか、自分のジェンダーの問題、自分の身体の問題といったことを説明してからでないと相談ができないということもかなり多くある。しかもそれを説明したら最後、「あなた方の相談は聞けない」と言われることもたくさんある。今、ワンストップセンターなどが各地にできていますが、相談をしっかりと聞ける場所は何個あるのでしょうか、という感じです。「相談を聞きます」と言っているところで

も、実際に電話をかけた時に非常に差別的な対応があったりすることはすごく多いです。その都度、そのセンターと当事者の方の間に入って、「もっとこうしてほしい」といった要望を私たちから言って、何とかサポートしていただけることもあれば、まったくそうではないということもまだあります。かなり有名な大きなところでも、そうしたことがまだまだ起きているというのが実情としてあるので、当事者の負担はとても大きいです。

また、本人自身がカミングアウトをしなければいけない。たとえば裁判とかになっていくと、親族、学校、職場、友人等への影響もある。だからこそ言えない。

また、一番大事なことですが、社会システムへの不信感というものをみんな持っています。自分自身が被害にあったということを話しても大して聞いてもらえないんじゃないか、差別的な対応をされるんじゃないか、どうせわかってももらえないだろう、そうした不信感が根底にあるからこそ、被害にあったということが言えない、という人たちが多くいます。

です。LGBTIQAの相談を聞く、性暴力に関しての相談を聞くという意味では、「ああ、LGBTは知ってる」ということでは足りないんです。よくワンストップセンターなどで、「LGBTの研修はしているから大丈夫ですよ」と言われますが、「何の研修をしたんですか？」と聞くと、大体1、2時間くらいの研修をしているところが多いですが、「Lとは」「Gとは」といったことを知ったところで相談を聞けるはずがないんです。女性相談は各所でやっていますが、女性相談を受ける相談員たちが女性が生きているコミュニティについて知らなければ相談を聞けないのと同じで、LGBTIQAが生きているコミュニティを知ったうえで、どういう困難があるのかということを考えていかなければいけない。

対抗すべきは、元となる差別／偏見

もともとこの社会には差別や偏見があって、そのことが暴力や貧困の温床になっているわけで、そうした中で生きているからこそ、社会的／経済的な阻害要因というのが周縁化していってしまう。保健／医療サービスや支援のあり方など、その人がよりよく生きていくために必要なものが乏し

くなっていってしまう。問題が周縁化されてしまうわけです。その中で、多くの人たちが孤立してしまう。孤立すると、差別とかいろいろな問題がより重篤化しやすく、病気になったりとか、自死のリスクを高めたりとか、人を傷つけるというリスクも高まったりする。だから私たちは常にこの根本となる差別や偏見に対抗していかなければいけないということです。

LGBの性暴力被害

数的な話に関しては、本当に数多くのデータがあって、日本でもいろいろなデータがようやく出てきています。ただ、日本のデータはものすごく安定していないといった中で、アメリカの調査などを使うことが多いです。日本の調査でいうと、宝塚大学の日高庸晴さんが性暴力についての調査を2016年から2回していたり、日本性教育協会が経年で40年以上やっている調査の中でも「青少年の性暴力被害」というところでこの数年はLGBTに関しても取っているようです。日本性教育協会についてはその調査に関して報告書で触れられてはいませんが、大枠でいわゆる一般の人々よりも被害率が高いと出ています。

けれども、やはり日本の社会の中では、「性暴力をどういうふうに定義するか」とか「性暴力ってなんだろう」という話があまりにもできていないから、調査をしても、自分に起きたことが性暴力だったという認識をしっかりとしている人というのはどうしても少ないと思います。それは、いじめの調査について読んでいた時に思ったことです。性暴力という枠だと数がすごく少ないけれども、いじめの中で性的ないじめがあったという数が性暴力被害にあったという数よりも多かったというデータを見たことがあるんです。その時にすごく思ったのです。いじめというテーマなら話ができるけど、性暴力というテーマだと話ができないということもまだまだある。これは全体的な問題として、私たち自身考えていかなければいけないと思っています。

細かいものについてはお渡ししている資料で読んでいただければと思いますが、被害率がとても高い。たとえば、「トランスジェンダーとジェン

ダーに非同調的な人々（ジェンダーノンコンフォーミング）の64%が人生の中で性暴力被害を経験する」というアメリカのデータがあります。レズビアンで8人に1人——これはもうデータによって違うので、かなり多くなっているデータもありますが——、バイセクシュアル女性の2人に1人、異性愛女性の6人に1人が生涯の中でレイプ被害にあっている。トランスジェンダーの55%がシェルター利用の際に嫌がらせを受け、29%がサービス提供を断られた。これに関してはアメリカのデータですが、日本の場合でいえば、トランスジェンダーがシェルターを利用することすら想定されていないという状態なので、稀に見るアメリカより悪いデータだと思いますが、日本の場合だと断られたというのがほとんどになると思います。

そうした中でも、初めて性被害経験を持った年齢では、34歳までで9割を占める。だから、より若いうちからその被害経験について話せる場所であったり、サポートする場所が必要だということです。それもしっかりとLGBTに関してのことを理解したうえでサポートできる場所というのが必要です。

一つすごく重要なこととしては、アメリカのデータではありますが、被害者支援をしている人たちの85%が、性的指向やジェンダーアイデンティティ（性同一性）のためにサービスを拒否されたLGBTQサバイバーが居たという回答をしています。85%はすごく大きな数字だと思いますが、私自身もいろいろな場所で相談を聞いていたりして、何度も聞きました。その都度、なんとか闘いながらとかやってきましたが、LGBTのことを話したくない人たちはよく「そういう人」という言い方をしますが、「そういう人たちの相談はそういう人たちのところで聞いてもらったほうがいいかな」というような言い方であったり、そうした形で断っているのを何度も見てきましたので、日本も同じような状況だということは言えると思います。

加害者に加担する社会

こうした社会は加害者に加担する社会だと思うのです。性暴力加害者と

いうのは、加害をする時に「訴えられない」「バレない」の根拠となる言説があるからこそやるというところがあると思います。

加害者が狙う加害対象者の脆弱性はどこから生まれるだろうか、というと、先ほどの伊藤さんの話の中でステレオタイプとして「無力で脆弱な被害者像」といった話があったと思いますが、それは加害者がすごく利用できるものでもあります。脆弱性を持っている人たちで、しかもその人たちはサポートをされていない、そう思って加害をする。それをそのままにしてしまう社会というのはものすごく加害者に加担してしまう社会だと思います。

性暴力を防止する“あなた”の役割

「性暴力を防止する“あなた”の役割」というのは、アメリカの性暴力に関するナショナルセンターであるRAINNが出した文章ですが、ぜひ読んでいただければと思います。

性暴力を防止する“あなた”の役割

Your Role in Preventing Sexual Assault

(RAINN: RAPE, ABUSE & INCEST NATIONAL NETWORK)



- アメリカで性暴力被害にあった293,100人/年の大半が被害を受ける際に加害者以外の傍観者がいたことを、証言
- 傍観者＝被害／加害に直接関与してはいませんが、性暴力に至る状況を目の当たりにしている
- 傍観者＝安全な場所を確保する、状況をよりよくするための行動をとることが出来る唯一の存在
- 違和感に気づいた時／家飲みで／パーティーで／路上で
- 対処法（相談先、法的手段）を伝える／空気を変える／場所を変える／積極的に逃げる
- 被害にあわない方法ではなく、被害にあった際の情報を知る

サバイバーの声を聞くあなたの役割

ぜひ覚えておいていただきたいのは、LGBTの被害はあまり聞いたことがないという人たちもたくさんいると思うのですが、サバイバーの声を聞くためには、私たちが声を届けなければいけないと思うのです。それは、「あなた方の被害の話は私たちにとっても重要だ」ということ、「この社会で声を上げてくれれば、私たちは助けを出す」ということ、「助けを求めれば助けが得られる社会だ」ということを、私たちは常に言い続けたいと思います。サバイバーの声を聞くための、皆さん方のそして私たちの役割として重要な点は以下のことだと思います。

- ・サバイバーたちに呼びかける以上に自らがサバイバーに声を届けること
- ・サバイバーが声を上げやすい環境を作ること
- ・サバイバーが言いたいことを理解するためにバックグラウンドを知ること
- ・サバイバーのいるコミュニティに興味を持つこと
- ・自らを投影せず、サバイバーのバックグラウンド自体をサバイバーを理解するための材料とすること
- ・学ぶことをやめないこと
- ・正しさではなく、サバイバーのニーズを理解すること
- ・サバイバーのサバイブを手助けすること

キーポピュレーションへの声かけ

これはアメリカの団体がやっている、男性同性間とか女性同性間とかトランスジェンダー、それぞれに対しての声かけのポスターです。こうした形でいろいろなキーとなる人々に声かけができればいいなというふうに思っております。

付帯決議

最後ですが、2017年に刑法が改正されて、付帯決議として「相談、捜査、公判のあらゆる過程において、被害者となりうる男性や性的マイノリティに対して偏見に基づく不当な取扱いをしないことを、関係機関等に対する研修等を通じて徹底させる」ということが入りました。これをもって2020年、新たな改正議論が進んでいます。私たちとしては、よりLGBTIQが使いやすいような制度作りというところで政策提言なども頑張っているところですので、ぜひ興味を持っていただければと思います。

時間になってしまいましたが、これからも興味を持っていただければと思います。よろしく申し上げます。ありがとうございました。